

＜北海道熊研究会 会報＞ 第 85 号 2018 年 11 月 3 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の 1～84 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜熊の生態が近年変わったと言うが、それは真実か＞私の結論は否である；その理由を述べる

2010 年頃から「人慣れした熊、新世代熊」等の呼称と共に、熊が人家付近や人の居る場所で採食して居る等、それ以前には見られなかった事象が見られ、それに伴い、熊の生態が変わって来たとの記事が出始め、現在も同様の記事が新聞やテレビに出る」

私の 50 年間にわたる熊に関する調査での結論は、熊の生態(生活状態)は 50 年前から今に至るも基本的に不変である。

不変と言うのは「熊は己の身に危害が及ばないと確信すれば、人家付近でも、人が居る場所でも、人との距離が十数メートル離れて居れば、その場で平然としている種である。それは 50 年前から変わらない、熊の特性である。

熊が人との関係で最も嫌うのは、銃器での銃殺である。-----熊は銃器の強烈な爆発音とそれで殺される事を極度に恐れる。銃で脅かされた経験がある個体は、以後それを避

ける。母熊と子熊の場合は、銃で銃撃されたが、幸い弾がそれ、銃撃を逃れ得た母熊は、以後そのような場を避け続ける。母熊が避けて居た場所は、子熊も母から自立した後、そのような場所を避け続ける。その場所での銃撃を止めても、自立した子は母熊が避けていた場所を数年から 12、13 年間は、使用を避ける。その後になってやっと、その場所が、本能的に身に危害が及ばない事を悟ると、行動域として使う様になる。故に、熊が人の生活地やその付近を使い出したからと言って、「熊の生態が変わったと言う事にはならない」。

北海道では 1998 年頃から、特に市街地付近では、銃器での捕獲が年を追って減少し、檻罠での捕殺が多用され出した。その結果、公園やその類似場所市街地付近で、発砲が無いために、熊が己の行動が阻害されない事を悟り(実際は檻罠での捕殺はあるのだが)、避けていた場所に出没するようになったと言うのが真相である。

< 檻罠での熊捕獲の歴史 >

アイヌの人達が狩猟採集の生活をしていた時代は除外して。

① 千歳アイヌの今泉柴吉(1891~1965)さんが、8 番(6 ミ)の鉄線で作り、1964(昭和 39)年に、熊 1 頭を獲ったと言う檻罠が登別クマ牧場の資料館に展示されている

② 北海道で本格的に普及したのは昭和 54 年(1979 年)8 月 13 日に沼田町字昭和で蜂箱を誘餌とした檻罠で推定年齢七歳の雄の熊の捕獲